

シュライエルマッハーの個性概念とその現代的意義¹

The Concept of Individuality in Schleiermacher and its Today's Significance

水谷 誠
Makoto Mizutani

第一章 現代世界とアジアの文脈におけるシュライエルマッハー

イ・ヤンホ先生からルターについて発題をいただきました。私は同じドイツ語圏の思想家であり、19世紀のプロテスタント神学に大きな影響を与えた、フリードリヒ・ダニエル・エルンスト・シュライエルマッハー(Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, 1768-1834)について、相互宗教間対話が必然の課題になっている我々の時代を念頭に置いて、上記テーマの発題をいたします。

1999年2月に、ドイツ・ハレで国際的規模を持つシュライエルマッハー学会が開催されました。すでに1984年、没後150年を記念してベルリンで規模の大きい学会が開催されていますが、その後、国際シュライエルマッハー協会が設立され、その最初の学会がこの1999年のものでした。これは、『宗教論』第一版の出版200年を記念したもので、その主題設定も『宗教論』とその周辺の事柄に絞られ、300名を超える参加者、40名を超える研究発表者を迎えての盛況の会でした。²

この学会にはおよそ十の国々から参加した研究者が発表しましたが、アジアからの発表者は私とそして哲学の領域でドイツで研究した若い韓国の学究でありました。この方は『宗教論』の韓国語訳を出されたと同っています。現在、シュライエルマッハーは日本においても、韓国においても神学的にそれほどの注目を浴びておりません。しかし、彼はまず第一に神学者・牧師であり、種々の点で彼の学問、とりわけキリスト教神学の彼の構想は、アジアで作業をする我々と21世紀を展望する時に、有益な刺激を与えるものであります。このアジアと21世紀という点を念頭に置いて彼に注目する時に、言及すべき二つの点を挙げたいと思います。

まず学際性という点です。1810年に創設されたヨーロッパ最初の近代的構想を持

フンボルト大学・フンボルト大学の理念には創設者フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)と共同作業をしたシュライエルマッハーの学問理解が下敷きになっていますが、その構想は現在にも新鮮な問題提起をしています。彼の学問の構想によれば、神学は一般諸学の共同体として成立しています。神学の入門的案内である彼の著作『神学通論』では、神学的作業の目的をキリスト教会の指導ということに置いています。この目的を達成するために一般の諸学問を援用して組織化されるものとして神学を構想しています³。同志社大学も延世大学も総合大学であり、それぞれ種々の学問分野を内に含んだ知の共同体です。それらの諸分野における方法論や成果をキリスト教という宗教を探究、吟味する営みに援用するという構想は、総合大学という機関にふさわしい学問のあり方だと言えます。もちろん、現代では、一つの大学に留まらず、諸大学の連携の活動が盛んとなっていますし、それに留まらず、種々さまざまな研究機関と共同作業をする中で課題を包括的に理解しようとする構想は現実のものとなっています。古典的な学問である神学は、しばしばその閉鎖性を指摘されてきましたが、方法論的な自覚のもとで神学の扉を開き諸学を取り入れる試みをしたという点で、今後消えることのない価値を彼の構想は有しています。

もう一つの点は、20世紀になって本格化したエキュメニカルな運動を先取りする存在であったことです。シュライエルマッハーの後期の代表作、いわゆる教義学の教科書である『信仰論』は、その表題に「福音主義教会の諸原則にのっとった…」と記しています⁴。それは宗教改革以来のドイツ・プロテスタンティズムの二大教派、ルター派と改革派の合同の教義学として執筆されました。シュライエルマッハーは19世紀プロイセン国内のこの二つの教派の間に根本的な相違を認めることのなかった神学者であり、両者の合同(Union)を理論的に指導した人物でした。この『信仰論』では、さらに、カトリック教会とプロテスタント教会の相違を、イエス・キリストと教会と信仰者という三つの軸の関係構築の相違として位置づけ、両者を対立の構図、優劣の構図、正誤の構図から解放し、併存可能なキリスト教の歴史的形態の固有な二つのあり方だとする視点を築きました⁵。ここには、キリスト教世界内部での教派对立を克服する意図、すなわちエキュメニカルな視点、キリスト教諸グループの対等な協働を可能にする視点があります。

このプロテスタンティズムとカトリシズムを神学的に対等に共存させる態度は、さらに諸宗教の理解に及び、キリスト教に留まらず、諸宗教の存在価値を原理的に承認する姿勢を内に含んでいます。多文化社会に変容しつつある現代世界にあって、相互宗教間対話を促進する今日の構想を彼はすでに先取りのに所有していたということが出来ます⁶。本日の発題ではこのことをいくばくか詳しく、彼の若い時代の代表的著作である『宗教論』における個性性概念を中心に分析することで示します⁷。

第二章 宗教の本質

『宗教論』は、彼がベルリンのシャリテ(Charité)付き改革派担当牧師であった時代に書かれました。シャリテとは傷病兵や飢餓の中にいた人々を収容する国の施設でしたが、現在ではフンボルト大学医学部付属病院となっています。この職務の合間をぬってシュライエルマッハーは当時の知識人たちの集まるサロンに出入りしました。サロン文化は当時ベルリンで花を開いていましたが、ヘンリエッテ・ヘルツ(Henriette Herz)主催のサロンではロマン派の文人たちと交流し、その刺激を受けました。この著作は1797年11月、彼29歳の誕生日のパーティに集まったそれら友人たちを前にして、一つの著作を刊行すると約束をしたことに由来し、1799年に日の目を見ることになりました⁸。

この著作は、当時の教会当局あるいは保守的なキリスト教層を意識したのか、まずは匿名で出版されました。しかし、ほどなく著者は明らかになり、その刺激に充ちた内容は多方面に種々の影響を与えることになりました。これは、存命時になお三回改訂され、現在にいたるまでも読み継がれている宗教を扱った古典的著作であります。ちなみに、日本では1914年に石原謙が翻訳して以来なんと五人の訳者により六種類の翻訳が出されています。

宗教の本質は、この著作第二講に有名な定式でもって表現されています。この本質とは「宇宙の直観と感情」、すなわち宇宙を観て感じることであり、また「無限なるものの感能と趣味」、すなわち無限なるものを感じ味わうことです⁹。これは18世紀の啓蒙で展開された人間の心的能力を三つ「知識・情感・意欲」に分類する図式に立脚しています。宗教とは思考でも行為でもない、思弁(学問)でも実践(技巧)でもない。宗教は、対象から得られた情報を思考・分析するという理論的な反省作業を通して、つまり知的媒介物を通して獲得できる知識ではありません。ここには、信仰の本質を知的側面で理解しようとした17世紀の正統主義神学への批判やドイツ啓蒙の形而上学的神学への批判が見られます。宗教は、さらに、道徳的、倫理的な営み、実践的に人間の自由を発揮してそれを態度に表現していく時に現れるものでもありません。ここには、実践的道筋を通して神の存在を確保しようとしたカント的な論理に対する批判が潜んでいます。

この宇宙の直観(宇宙を観るということ)では、直観する主体は人間でありつつも、直観を通して得られるその内容は、直観されるもの、つまり直観の対象の影響下に置かれています。「すべて直観の営みは直観されるものの直観するものへの影響に、つまり根源的で独立した直観されるものの行為に由来する」¹⁰。伝統的表現を使えば、人が宗教を所有するには神的啓示に依存しなければならないということでしょう。宗教はこの宇宙の行動に直接的に捉えられることです。宇宙の行動を感受し、それに充たされるという直接的経験にその本質があります。この意味で、宗教を成立させる直観、感情は、主体である人間の能動性を前提にする知識や行為とは基本的に異なり、「幼児のような」受動

性をその特徴にしています¹¹。知識は人間が自らの本性を駆使して地上から天井にかけあがろうとする試みであり、行為とは人間が自らに与えられた自由に基づいて神の国を建設しようとするものだからです。このように直観されるもの、直観の対象からの影響を受動的に身に受けるという営みと共に、この営みを通して蓄積されていく感情が宗教の成立基盤であるとシュライエルマッハーは考えたのです。

ところで、シュライエルマッハーの場合、無限なる宇宙は当時の超自然主義的理解に見られるようにそれ自体が人間に姿を現すわけではありません。この世界に生を営む人間が宇宙を直観して、その宇宙の行動の影響下に置かれるという場合、その直観の直接の対象は、すべて、この世界に存在するものであり、それ以外ではあり得ません。自らが捉えられていると自覚しているか否かは別として、そもそも個体的存在、すなわち有限的存在というもの、つまりこの歴史的世界、自然的世界に生きるすべての有限的存在は、いわば無限なるものから切り取られて成り立っています。この切り取りによって部分化されたゆえにそれらの存在は限界、境界を持つに至っています。しかし、それと同時にこの有限的存在は無限の一部として無限自体を内に蔵しています。宗教は有限世界の内側にあるもの自体に無限そのものを観ようとし、有限という部分的なものの中に無限という全体を直観しようとし、この有限な存在、部分とは自然世界、歴史世界にあるものを指しており、人間もその一つであります。「宗教は人間の中に、また他のあらゆる個物、有限なものの中に、無限を、その印刻を、その叙述を見ようとする」のです¹²。我々の住む世界に対する宗教的解釈であるとも言えるこの宗教理論を、シュライエルマッハーは当時行き渡っていた観念論ではなく、従来の素朴な實在論でもなく、「高次の實在論」であると称しました¹³。

第三章 個性ないしは多様性の承認

シュライエルマッハーは、このように有限の中に無限を、部分の中に全体を観ることが宗教であると考えたのですが、この定式に含まれた「有限の中に」「部分の中に」という表現と「観ること」という表現から、個性性 (Individualität) 思想について考察します。個性性思想は、『宗教論』が出された翌年の1800年に出版された『独白録』(Monologen)で倫理的な次元で本格的に展開されています¹⁴。しかし『宗教論』自体も、歴史的に形成された個々の宗教自体の特性としてのこの個性性に着目しており、シュライエルマッハーの宗教理解の核心を形成しています。

まず「有限の中に」という表現です。歴史世界、それはもちろん人間も含むわけですが、そして自然世界は、この有限という制約の下に置かれており、個物、部分の集合として成り立っています。それらは断片的であり、限界の中にあります。しかし、この限界を

持つものによって構成されている世界は、「無限から切り取られ」たものである限り、同時に無限をも所有しています。それらの一つ一つはそれ自体として無限であるわけです。この無限を内に蔵している、換言すれば、有限性の中で無限に与っているという意味で個物は決定的な価値を持つことになります。シュライエルマッハーはこのことを個性という概念で言い表しました。個性とは、この世界内に存在する個物のそれぞれ、限界を持っている個体の一つ一つが、「無限から切り取られ」たものとして同時に無限である、その意味で決定的な価値を持つというところに成立する概念であります。

次に「観る」(直観する)という表現です。『宗教論』第一版は宗教の本質を論じる際にとりわけ「直観」という概念を強調します。パネンベルク(Wolfhart Pannenberg)は、直観をする主体としての個人はそれぞれ任意に種々の宇宙の直観を持つゆえに、それによって生じる宗教的直観はそれぞれの個人の数に対応して言わば無限の種類を持つことを指摘しています¹⁵。さらに、その同じ個人の直観にしても、最初の瞬間から時間を経て観るならば、また空間的に場所を変えて観るならば、それまでとはまた位相を異にした直観を得ることになります。一人の人が複数の宗教的直観を所有することもあります。そのうちの何らかの直観が優勢なものとなると、その優勢な直観に収斂するようにその他の複数の直観は統合されることもあります。宇宙の直観と感情が宗教の本質を形成するという場合、この直観は一個人の主体的直観として種々多様であり、さらに主体が異なれば、また別様に種々多様になります。その結果与えられる宗教的感情もまたその直観の多様に対応して多様であるのです。もちろん、それら一つ一つは宗教的個体として、同等の、そして決定的な価値を持っています。宗教の活きた本性は「多様性と個性を象徴と」しています¹⁶。

つまり、多様な直観によって成立する個人の宗教性は、そのそれぞれが宇宙の直観と感情によって成立したものとして宗教の本質を現しているのですから、それを引き起こす宗教的直観の一つ一つは真正の価値を持つものです。有限なものの中に無限を直観するという場合、無限を表現するものである多様な有限存在は個体としてその価値が認められ、さらに多様な直観によって成立する個人の宗教性もまたそのそれぞれが個体としての価値を持っているのです。換言すれば、個性は多様性の根拠であり、多様性は個性の必然的結果だと言うことができます。個性の承認はその多様な個体の一つ一つを承認することであり、多様性自体を保証します。

第四章 諸宗教

『宗教論』の締めくくりの第五講では、これらの個々の宗教的直観が、歴史的具体的な形態を持つ宗教、いわゆる実定的(積極的)宗教(positive Religionen)としての諸宗教に

統合されていくさまを扱います。歴史に具体的に現れた宗教の成立根拠についてのシュライエルマッハーの案内は宗教哲学的、思弁的傾向を持っています。それぞれの歴史的宗教の特質を形成するのはその宗教の創始者の根本直観(Grundanschauung)です。その創始者に現れた吸引力豊かな宗教的な根本直観に収斂する仕方で、個々の宗教的諸直観が統合され、一個の宗教共同体へと展開します。キリスト教の場合には、それはイエス・キリストの根本直観であり、墮落と救済、敵対と調停という概念に言い表すことのできる内実が互いに不可分に結合されたものです。いずれにしても、個々の宗教的諸直観の、それぞれの価値が認められているとするならば、創始者の根本直観に基づくそれら個々の直観の集合としての共同体、すなわち実定的な歴史宗教もまた必然的に個体としての価値を持ちその存在は承認されることとなります。

この点では、シュライエルマッハーもまた歴史宗教に現れる問題性を自覚しています。「無限なるものが不完全で制約を受けたおおいを身につけ、時間の領域、有限な事々の影響を一般に受ける領域に降りてきて、その支配を受けるようになると、多くの墮落が起こるのは避けがたいのです¹⁷。しかしシュライエルマッハーによれば、宗教は宇宙を直観しその感情に充たされることをもってこの世界のものとなるのであり、このような歴史的姿を持ちえない宗教とは、宇宙の直観と感情をそもそも持ちえなかったものとしてそれは宗教ではありえません。リングレーベン(Joachim Ringleben)はこの事態を「本質なしの現象はありえず、現象しない本質はありえない」と適切に表現しています¹⁸。シュライエルマッハー流に表現すれば、宗教は具体的な個体とならざるを得ないのです。そしてこの歴史的具体的な、墮落も含む形姿の中に「天井の美」を発見すること、有限な現象の中に宗教の無限性を発見することが肝要なのです¹⁹。

第五講で論じられる諸宗教は、具体的にはキリスト教とユダヤ教でしかありません。またユダヤ教の叙述は僅かです。ユダヤ教を「応報」の原理に基づく宗教であるとの彼の説明も今日においてどれほどの妥当性を持つのかは検討の対象です。この両者以外の、当時活動を続けていた諸宗教について事柄に即した適切な情報を彼が十分に身につけていたわけでもありません。個々の点では、シュライエルマッハー以降に展開を遂げた宗教学的知見、それぞれの宗教の学問的研究に委ねられなければなりません。しかし、シュライエルマッハーによれば、原理的な意味で、歴史的諸宗教はすべて無限なるものを直観したもの、その刻印を帯びたものとして肯定されているのです。

第五章 まとめ 多元化した社会の宗教

初めに述べたように、プロテスタンティズムとカトリシズムとはキリスト教の個性

的な二つの形態として併存しているとシュライエルマッハーは考えました。エキュメニズムの先取りです。プロテスタント各派については、ルター派と改革派に一致を妨げる理由はないとして教派合同の教義学を構想しました。もっともこの点については、現代の観点からコメントが必要です。『世界キリスト教百科事典』は、20世紀に爆発的にキリスト教人口は増加し、とりわけ欧米世界の宣教活動がなされた地域でのキリスト教が成長していることを指摘し、従来のように東方のキリスト教、西方の二つのキリスト教、つまりカトリシズムとプロテスタンティズムの合計三つの分類で済ませることができなくなったことを記しています²⁰。プロテスタンティズムも非ドイツ語圏の展開を考慮するとき単純ではありません。プロテスタンティズム自体もまたその中に種々の固有の価値を持つ個体が活動していると見ることができます。私は、この意味でシュライエルマッハーの個性概念をキリスト教各派の存立の根拠にも適用したいと考えています。

さらに、諸宗教が分立し、相互の接触が不可避となっている現在、それら諸宗教間の相互対話は必須の課題となっています。また、近代世界においてキリスト教が宣教されることになった地域、元来はキリスト教とは異質であった文化と宗教を持った地域では、その文化に密接に関連して営まれてきた諸宗教との対話もまた不可欠のことです。シュライエルマッハー自体は、18世紀から19世紀の転換期にあって、このような事態を想定していたわけではなく、また今日にいたるまで活動を続けているキリスト教以外の諸宗教について十分な情報を得ていたわけではありません。しかし、にもかかわらず、彼の神学的構想は、キリスト教の自己理解として、すでに個別宗教の存在の価値を原理的に承認していたのです。シュライエルマッハーは相互宗教間対話を先取的に展望することのできた思想家であったのです。『宗教論』出版から200年を経た1999年にこの著作をめぐって開催された学会で活発な議論が繰り広げられましたが、この近代の古典的思想家を通して我々の神学的作業を吟味し、豊かにする作業は21世紀においても、また我々のアジアにおいても多くの示唆を与えるものだと思うのであります。

注

- 1 これは、2002年2月20日に同志社大学神学部と延世大学校神科大学とが共同で開催した神学シンポジウムで発題した原稿に修正を加え、注釈を付加したものである。
- 2 1984年にベルリンで開催された学会の報告は、Internationaler Schleiermacher Kongreß Berlin 1984, hrsg. von K.-V. Selge, Schleiermacher-Archiv, Bd.1 in 2 Teilbde., Berlin 1985を参照。シュライエルマッハー協会 Schleiermacher-Gesellschaft は、1996年9月に創設された。事務局はハレ大学神学部。1999年2月にハ

- レで開催された学会の報告は、200 Jahre „Reden über die Religion“, Akten des 1. Internationalen Kongresses der Schleiermacher-Gesellschaft Halle 14.-17. März 1999, hrsg. von U. Barth/C.-D. Osthövener, Schleiermacher-Archiv, Bd. 19, Berlin/New York 2000 を参照。
- 3 Kurze Darstellung des theologischen Studiums zum Behuf einleitender Vorlesungen, 1. Aufl., 1811, 2. Aufl., 1830
 - 4 Der christliche Glaube, nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt, 1. Aufl., 1821/22, 2. Aufl., 1830/31
 - 5 同上、2. Aufl. 第24節主命題参照。
 - 6 宗教の多元性とシュライエルマッハーの構想との関係については、最近 M. Schröder が以下の論考を発表している。Markus Schröder, Das „unendliche Chaos“ der Religion. Die Pluralität der Religionen in Schleiermachers ‚Reden‘, in: 200 Jahre „Reden über die Religion“, Schleiermacher-Archiv, Bd. 19, Berlin/New York 2000, S. 585-608
 - 7 Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern, 1. Aufl., 1799(以下 Reden と略称する)
 - 8 姉 Charlotte Schleiermacher に宛てた手紙参照。Friedrich Schleiermacher. Kritische Gesamtausgabe, Briefwechsel und biographische Dokumente, Bd. 2, Briefwechsel 1796-1798, S. 213
 - 9 Reden, S.50ff.
 - 10 Reden, S. 55
 - 11 Reden, S. 50
 - 12 Reden, S. 51ff.
 - 13 Reden, S. 54. „einen höheren Realismus“. この用語はシュライエルマッハーの宗教理解の特徴を表現したものであるが、そもそも実在論という用語は唯一この箇所にもみ出でくる。F. Hertel, Das theologische Denken Schleiermachers, Zürich 1965, S. 297 参照。
 - 14 Monologen. Eine Neujahrsgabe, 1800
 - 15 Wolfhart Pannenberg, Problemgeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland, Göttingen 1997, S. 52f.
 - 16 Reden, S. 53
 - 17 Reden, S. 246
 - 18 Joachim Ringleben, Die Reden über die Religion, in: Friedrich Schleiermacher. Theologe-Philosoph-Pädagoge, Göttingen 1985, S. 255 参照。
 - 19 Reden, S. 238
 - 20 『世界キリスト教百科事典』(竹中正夫監訳)、教文館、1986年、第一部「20世紀の世界キリスト教概論」、第二部「現代世界の宗教、キリスト教統計」、11-48頁参照。